

『機動戦士Zガンダム』を語る

続編は何故作られたのか？

はじめに

『現代風俗データベース 1986→1987 (世相風俗観察会編)』(河出書房新社発行)という本がある。

当時の流行り物を列挙したもので、このような文がはじめに記されている。

「(前略) 80年代に入って、資本主義は加速したとよくいわれる。この時代の中心的なメディアは、「広告」であり、「商品」であった。企業の側が「差異化戦略」により、なんらかの記号や付加価値をつけて送り出してきた商品を、豊になり消費文明ならされた消費者が買う(後略)」

日本がバブル景気(1986年から1991年)に突入し、この行為は益々加速していくのだが80年代商品の代表に必ずあがるのは『機動戦士ガンダム』のプラモデルである。

この時代は世界は二陣営に分かれ、核ミサイルでお互いを恫喝していた。

そして戦争には関係しないと経済に全力を注いだのが日本である。

防衛よりも経済を優先した結果、本来資本などが投入されない分野の娯楽にも資本や人材が集まった。(不動産や美術品にはより多額の資金が投入された)

その時代『機動戦士ガンダム』はアニメ・ブームのシンボルとなりアニメ関連産業を引っ張り、オタクを成立させる土壌になった。

『機動戦士ガンダム』の続編『機動戦士Ζガンダム』を作るに当たり、富野由悠季が何を考え創作したのかを考察と妄想するのが、この文章の目的である。

ドキュメントでなく妄想であるので現実と混同しないようお願いしたい。

文中敬称は省略いたしました。

富野由悠季と『機動戦士ガンダム』の始まり

『機動戦士ガンダム』の原作者でアニメ監督の富野由悠季、本名を富野喜幸（とみのよしゆき）という。

『鉄腕アトム』（1963年1月1日放送開始）のスタッフ（二年目以降になるが）であり、多数のアニメで演出家として活躍し、2014年に新作アニメ『Gレコ(仮)』が正式に発表される予定である。

テレビアニメ初監督作品『海のトリトン』（1972年4月1日放送開始）は手塚治虫の原作を大幅にアレンジしたもので、衝撃的な最終回は話題となった。

また『海のトリトン』は私設ファンクラブが作られ、その熱心な活動は有名であったという。

当時サンライズ（アニメ制作会社）で『無敵超人ザンボット3』『無敵鋼人ダイターン3』の監督として連続してキャリアを積み、一風変わった作品を作る人物とマニアは認識していた。

『機動戦士ガンダム』は前二作で評判をあげた富野由悠季が挑む意欲作として、マニアやアニメ雑誌ライターに放送前から期待されていた。

富野監督は今でこそサンライズの重鎮だが、当時のサンライズを代表する監督は長浜忠夫（『巨人の星』『ベルサイユの薔薇』の監督）であった。

サンライズが下請けで制作していたロボットアニメの監督を任せられ、業界にカムバックし、その独特の作風でロボットアニメなのに中高校生など若い女性から高い人気を得ていた。

長浜忠夫は富野由悠季の師匠と呼べる人物で、『機動戦士ガンダム』も長浜忠夫の功績があればこそ、と論ずる人は少なくない。

ファンとの交流を大事にする人でファンレターへの返事や、感想を纏めた冊子をつくりファンへの配布などをしていたらしい。

また新人監督時代からベテラン声優に演技指導していた逸話もある。

当時妙にオープンなサンライズの社風も長浜監督の影響があったからではなかろうか？

フランスとの合作アニメ『宇宙伝説ユリシーズ31』（1981年10月10日放送開始）の監督となりサンライズを離れたが、その作品が遺作となった。

当時『宇宙戦艦ヤマト』から始まったアニメブームも、テレビシリーズの『宇宙戦艦ヤマト2』でファンの失望を買い失速ぎみであった。

これは劇場アニメ『さらば宇宙戦艦ヤマト 愛の戦士たち』のリメイクで劇中で死亡したキャラクターが生存する、続編制作を臭わせる作品であったこと

をファンが嫌ったのだ。

ただ『宇宙戦艦ヤマト』も1974年放送と『機動戦士ガンダム』より五年も前の作品で、子供からすれば古いアニメだと感じていた。

また『宇宙戦艦ヤマト』はパクリにくい作品であるという問題もあった。

残念ながら良い作品というだけでは駄目で、模倣される発明やアイデアが多数なければ業界全体を盛り立てるには不足なのだ。

そしてビデオが普及していない時代「作品をみること」が大きなハードルであった。

だからアニメブームは一部のアニメ好きな少年達のもので止まっていた。

普通の子供は野球や映画スターに歌手などに夢中であつたし、アニメは小学校で卒業するのが当時の常識だ。

だから、長浜監督のアニメが中高校生の女子ファンを獲得したのは偉業であつたのだ。

そんな時代『宇宙戦艦ヤマト』制作の中心であるオフィス・アカデミーの商売手法をサンライズは研究し、それを『機動戦士ガンダム』へフィードバックした。

東映アニメーションでは原作者の松本零士をフィーチャーした。

松本アニメの制作ブームがあり『銀河鉄道999』は人気となった。

東映は漫画原作者と共同で子供向け作品の企画を作る会社だったので、『宇宙戦艦ヤマト』で当てた松本零士を起用するには当然だった。

資本力があればサンライズもそうしただろう。

その分析結果の一つとして『宇宙戦艦ヤマト』で生まれた中高校生（のアニメファン）をターゲットにして『機動戦士ガンダム』は企画されることになる。

『機動戦士ガンダム』スタッフの合い言葉は「ヤマトを潰せ」であった。

ファンの人気の勢いは落ちたとはいえ『宇宙戦艦ヤマト』は偉大な作品であり、目指すべき目標であつたのだ。

『機動戦士ガンダム』の企画はサンライズの岸本社長が当時頭角を現していたアニメーターの安彦良和を盛り立てようと進めていたものだ。

作家の高千穂遥から借りた『宇宙の戦士』を元にロボやキャラのデザインや設定を進めていたが、高千穂遥は難色を示したという。

それは開拓惑星に宇宙人が攻めてくるというそのままの内容であった。

（当時ロボットアニメの企画はロボットなどのデザインを決める為のもので、内容は自由にできたので大胆な変更も可能であった。

一年もののアニメでは設定を曖昧にしたまま制作することもある。

特撮番組では現在もそのような状況で制作されているという)

後から監督として富野由悠季が参加が決定し、デザインと名称以外の設定を変更した新たな企画書を書き上げた。

『成長の限界-ローマ・クラブ人類の危機レポート (1972年発売・ドネラ・H・メドウズ著)』は人口と資源の限界について書かれた書籍で富野由悠季に強い影響を与え、企画書(『機動戦士ガンダム』の原型)に反映された。

その企画書は当時のアニメとしては類を見ない斬新なアイデアに満ちていたが、富野由悠季は中学生までの知識で書いたという。

『機動戦士ガンダム』が放送されたタイミングも含め様々な運が良かった。

1977年に米国で『スター・ウォーズ』が公開されSFブームが起きた。

芸術作品のような『2001年宇宙の旅』(1968年公開)に比べると幼いストーリーは不評であったが、SFアクションドラマを一流のものに仕立て直したことは評価された。

『スター・ウォーズ』は様々な映画やSF作品の寄せ集めであったが、模倣したくなるようなアイデアも多数あり漫画やアニメだけでなく映画などで模倣された。

日本だけでなく全世界の様々な作品にも影響を与えた。

ただパロディ的要素の強い『無敵鋼人ダイターン3』で、『スター・ウォーズ』の影響を受け止め次作の『機動戦士ガンダム』で影響が最小であったことは幸いであった。

そして、このタイミングでなければ、小難しい宇宙ものの企画が通ることも無かったのではなかろうか。

『機動戦士ガンダム』は放送直後からアニメ・ブームで創刊されたアニメ雑誌の特集記事の定番となり、子供には難解な事柄もタイムラグはあったが解説された。

そして『機動戦士ガンダム』は業界から熱望されたポスト『宇宙戦艦ヤマト』の座を射止め、大勢の支援や声援をうけ(放送短縮されたものの)制作を全うした。

富野由悠季監督の他に、作画の安彦良和、演出の貞光紳也、脚本の松崎健一など宇宙知識に強いスタッフが集まったことも幸いであった。

そうしたスタッフ発想のアイデアも多数あり、作品世界を深くした。

今ならネットで簡単に調べられることでも昔はとても困難であり、クリエイターに知識のあることは作品のグレードを左右する重要な事項であった。

『機動戦士ガンダム』は模倣され、現在はスタンダードな作品となった。

『機動戦士ガンダム』(1979年4月7日放送開始)のあらすじ

人口増加と資源の枯渇に環境悪化が深化した未来、人類は地球連邦政府を組織し宇宙開拓に人類の未来を託した。

しかし強引な政策は宇宙都市サイド3・ジオン公国の反乱を呼び、総人口の半数以上が亡くなる大規模な戦争となった。

その戦争は初めて人型兵器モビルスーツが投入されたもので、連邦軍のモビルスーツ・ガンダム(ホワイトベース部隊)は伝説的な活躍をして連邦軍を勝利に導いた。

二人の主人公

『機動戦士ガンダム』は主人公アムロ・レイと仲間達の群像劇である。

だが現在ではアムロとシャア二人の物語として『機動戦士ガンダム』は認識されている。

アムロは機械いじりが好きな少年で、ガンダムを動かせたのも偶然だし兵士になるつもりも無かったが、パイロットとして戦うことになる。

戦場という環境で、出会いと別れをくりかえし、仲間とぶつかり合いながら成長していく。

そして戦火の中、アムロは人の革新と言われるニュータイプ的能力に目覚めた。

それは戦場でガンダムの性能を最大限に引き出す力になる。

同じくニュータイプに目覚めた少女ララァと戦い彼女を撃破する。

ニュータイプ同士の力により強い絆が生まれた少女を自らの手で殺してしまったアムロは巨大な喪失感を抱え、最後の戦場でシャアと対決する。

その戦いでガンダムは大破し負傷したアムロは死を覚悟するが、ニュータイプ能力でホワイトベースの仲間を救い、アムロは彼らの元へ帰還する。

ジオン軍の若き英雄シャア・アズナブル、偽名で本名をキャスバル・ダイクンという。

親の敵ジオン公国の支配者ザビ家に復讐を誓い、妹を捨て単身ジオンに潜り込み戦場で武勲をあげ赤い彗星のシャアという英雄となった。

友として近づいたザビ家の末弟を忙殺したが空しさが去来する。

しかし打倒ガンダムという目標、そしてニュータイプの少女ララァという最高の人材を得る。

だがガンダムとの戦闘の最中、シャアをかばいララァは死亡する。

シャアはララの死に涙する。

怒りにまかせアムロに恨みを抱いたものの妹の仲裁により自分を取り戻し、シャアはザビ家の生き残りに復讐を果たし死亡する。

『機動戦士ガンダム』について

解釈は人それぞれだが、自分には夢というものを問う物語であったように思う。

多くの人にとり夢とは届かない願いである。

だが夢が現実になった時、それで人は幸福になれるのだろうか？

人類の永続という夢、宇宙都市の独立という夢、それは多くの犠牲を生んだ。

アムロもシャアもそんな世界の中であがき夢を見た。

アムロは、いつかララと邂逅するという夢。

シャアは、ザビ家へ復讐するという夢。

アムロは夢から醒め、現実の仲間の元へ戻った。

シャアは夢を追い、死亡する。

アムロの成長のドラマなので、夢から醒めたら大人になるのがセオリーだ。

だがアムロは大人になるわけではなく、仲間の元へ帰る。

戦場で大人になってはいけない、平和な世界で仲間と大人になるべきなのだ。

そのようなスタッフからのメッセージなのかもしれない・・・と思う。

『機動戦士ガンダム』ブームもしくはガンダム・フィーバーについて

『機動戦士ガンダム』はロボットアニメならではのアクションと深いドラマの同居に、演出ミスや稚拙な間違いもあるが様々な要素が多様なレベルの表現が残されたことにより結果的に子供から大人、一般人から考証マニアまでと広い層が楽しめる映像になった。

また映画化によりブームが長期化したのは、商業的にも幸いであった。

当時『宇宙戦艦ヤマト』から始まったアニメブームも終息気味であったが『機動戦士ガンダム』で再加熱し、ガンダムを中心とした総合的なアニメブームとなる。

『機動戦士ガンダム』はアニメ、出版、音楽、映画、模型、玩具業界、デバ

ート、個人商店に駄菓子屋まで様々な業種がブームに乗ったことで商業的成功を収めた。

特にガンダムのプラモデル通称ガンプラは模型史に残るほど大ヒットし、日本の模型業界に強い影響を与えた。

模型誌も特集を組みガンプラ・ブームを支えた。

またコミックボンボン連載『プラモ狂四郎』は大人気作となる。

キングレコードも『機動戦士ガンダム』などアニメのレコード売り上げが好調でスターチャイルドレーベルを立ち上げる。

スターチャイルドは後に『新世紀エヴァンゲリオン』のプロデューサーとなる大月俊倫が入社することになる。

徳間書店のアニメージュでは富野監督の連載を開始する。

その時の編集がスタジオジブリの鈴木敏夫である。

この連載『イデオンのライナーノート』は成功し、鈴木敏夫は次の企画を企てる。

アニメブームで盛り上がった状況もあり映画を企画するが、徳間の社長に原作が必要だと言われ連載を開始したのが『風の谷のナウシカ』である。

ソノラマ文庫で発売された富野監督執筆『機動戦士ガンダム』の小説はベストセラーとなり、アニメのノベライズがブームとなる。

『機動戦士ガンダム』も売れたので続刊が決まり、三部作となった。

富野監督は井荻麟（いおぎりん）のペンネームで作詞を行い、アニメ主題歌をスタイリッシュなものに変えていく。

劇場映画化が決まった『機動戦士ガンダム』の二作目から組んだ井上大輔との曲はヒットし、日本テレビ系のトップ10番組でランクインし生放送で歌われた。

レコードは100万枚売れた時代のことで、アニメの曲がランクインするのは異例中の異例のことであった。

同人誌活動も活発化し、後のアニメ業界へ参入する人々の名前もあった。

科学ライターの永瀬唯や天才デザイナーの永野護などである。

この当時の同人誌は私設ファンクラブの機関誌であり、現在の薄い本が主流のものとは異なっている。

このように当時も今も作品の影響は大きく、またこの時代中高校生に向けた

商品が多く発売され、オタク業界の基礎もここで作られた。

そしてアニメ業界へ多数の資本を呼び込み、アニメ業界を活発化させた。

『機動戦士ガンダム』スタッフが本当にしたかったこと

単純に言うとアンチビジネスが『機動戦士ガンダム』の本音だった。

スポンサー企業にサンライズが反乱をしたのだ。

それが日本でも類を見ないほど多数の会社を潤す商業的に大傑作になるとは誰も予期し得ないものであった。

弱小会社であったサンライズが自社の顔となる特別な作品を作りたいと考えたのかもしれないが、脱子供向け作品を待望していた業界の気運も後押しをした。

ただし根回しやすし合わせを事前に行いリスクを最小限に抑えたうえでの、大人として筋を通した反乱だ。

当然従来のロボットアニメと異なるので様々な要求が出るが、それらをガンダム世界に合わせた映像に反映できたことは奇跡的な幸運であった。

社会現象となるほど人気を得たことで大人達が色々と画策するが、(人により価値観は様々だが)単純に良いドラマを作ろうというだけの事だったのだ。

30分のコマーシャル、ロボットプロレスと揶揄された最底辺のジャンルでも最高のドラマを作り出せるという、クリエイターの信念をかけた挑戦であった。

この時代（80年代）について

この時代、子供は貧乏で親にお願いして予算を確保していた。

アルバイトが許される大学生などは別にして中学生などのお小遣いは極端に少ない。

21世紀のオタクとの決定的な差である。

この少ないお小遣いを狙い大人が本気になるのが80年代だ。

この時代（80年代）のオタクについて

1979年放送された『機動戦士ガンダム』は中高校生をターゲットに制作された初めてのテレビアニメだ。

それまではアニメは大人か子供向けという極端な二択であった。

だから子供向け番組でも大人の視聴に耐える、というのをマニアは褒め言葉にしたのだ。

だが大人（＝マニア）の視聴に堪えない番組は駄作という論法にすり替わり、アニメ（子供向け番組）を間違った方向に進ませることになる。

他にもSFファンがマニアの頂点であるかのごとく振る舞い、SFかどうかで作品を選別した。

だがSF業界が心血を注いだ映画『さよならジュピター』（1984年3月17日公開）がこけ、SFマニアの勢いが弱まることになる。

赤川次郎が流行り難しいハードSFが避けられる時勢もあったが、言い訳は出来ないゾ。

情報格差が激しい時代で、アニメ雑誌などで人気の作品が未放送の地域のアニメファンは地元のテレビ局に放送を願う署名や嘆願書を出した。

行動的なファンはフィルム上映会を開き、アニメファンの集会を開いた。

同人サークルを作り会員を求め定期的に出版する活動や、文通仲間を求める人もいた。

このようなファン活動が、アニメ雑誌に紹介され拡大していくことになる。

その拡大のなかで「クラリスマガジン事件」のような問題もおきる。

当時有名な同人誌販売詐欺事件で、多数の被害者を出した。

またセル画泥棒というのが問題となる。

撮影後ならまだしも、撮影前の原動画ごと盗む連中も出て関係者を困らせる。

そしてアニメファン相手にニセセル画販売も横行する。

映画やイベントの徹夜で並んでいる連中にセル画を売り歩く怪しい奴らが出て、その売り物には複製したニセものがあったという。

アニメファンにセル画のコレクションがブームとなり、人気アニメーターの原画の名場面のセル画は取引価格で数万した時代のことである。

アニメの女の子が好きな人の事を”ロリコン”と呼ぼうという運動がアニメ（サブカルやポルノ漫画業界からのアプローチだったのかもしれないが）雑誌界隈で起きる。

様々な雑誌にロリコンの文字が肯定的な意味で掲載され、ザ・テレビジョンのアニメ特集でもロリコンの文字が大きく印刷された。

宮崎駿監督の『ルパン三世 カリオストロの城』のクラリス（美少女）や『未来少年コナン』のラナ（もっと幼い美少女）は、美少女好きの漫画家のモチーフとなり、優れた作品を盾としてロリコン趣味は思想エリートだという宣伝がなされた。

当時、宮崎駿はかわいい女の子を描くアニメーターとして認識されていたので、ナウシカの巨乳にファンは訝しんだという。

まあこうした布石があったので、1988年東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件の影響でアニメファンは性犯罪者予備軍だとテレビマスコミなどに叩かれる。

当たり前ですね。

ゼネラルプロダクツは正規版權を獲得し特撮メカのガレージキットを販売したりする特殊な店で、何故がアニメック誌で連載を持っていた。

ただし全てのアイテムで版權を得たわけでは無く、ビデオ販売していた同人フォームには版元に無許可で音楽などが使用された。

当時は版權に甘くメジャーな漫画でもアメコミヒーローなどを無許可で出していた。

ゼネラルプロダクツのように関西に一店舗しかない企業が版權を獲得することの方が異常だったのだ。

また全国のSFサークルが持ち回りで運営するSF大会を強引に主催し、資本力にまかせ強引に作った自主制作の同人アニメで観衆を唸らせたりもした。

こうした力任せというか、やった者勝ちなのやり方はガイナックス時代の作風にも現れている。

老舗のアニメポリスペロに、新興のゼネラルプロダクツ、アニメック（雑誌ではなくアニメアイテムの販売もしていた）、アニメイト（当時は株式会社ム

ービックの参加) などアニメグッズ販売会社が複数あったなかで、アニメイトが最大手になるとは当時誰も思わなかった。

『機動戦士ガンダム』から『機動戦士Zガンダム』まで

景気が年々良くなるという、現代の若い者達が体験していない未知の常態にあった。

都会でなくともアスファルトの道路が引かれるようになり砂利道が田舎の町から消え初めた頃である。

大家族の終わりの時期で、これから核家族化が進むことになる。

ファストフードやコンビニの地方都市への進出がこれを加速したのだ。

1979年：『機動戦士ガンダム』放送開始

ソニーから携帯型ステレオカセットプレーヤー・ウォークマンが発売される。

テレビ朝日『ドラえもん』が始まる。

再放送などで日本テレビ版を知っていたので、色々と違って驚く。

映画『銀河鉄道999 (The Galaxy Express 999)』が公開される。

原作が連載中であつたが、映画で先に完結が描かれる事で話題を呼んだ。

テレビドラマ『3年B組金八先生』がヒットする。

1980年：『伝説巨神イデオン』放送開始

『ウルトラマン80』が地球を守る。

山口百恵の引退、松田聖子のデビューや『三年B組金八先生』に出演していた田原俊彦（トシちゃん）、近藤真彦（マッチ）、野村義男（ヨッチちゃん）の3人のジャニーズアイドルによるグループ・たのきんトリオの結成などアイドルの話題が多かった。

漫オブームで、関西の若手の笑いというものに関東人が触れる。

ゲームウォッチ・ルービックキューブなどの遊びが流行る。

1981年：映画『機動戦士ガンダム』『機動戦士ガンダムII 哀・戦士編』公開

この年に始まった『オレたちひょうきん族』（フジテレビ）は『8時だヨ!全員集合』（TBS）に対抗するバラエティ番組で、漫オブームで人気となった芸人を多数起用した。

『8時だヨ!全員集合』が生放送でドリフターズの練習を重ね完成されたコントを見せるのに比べ、『オレたちひょうきん族』は失敗や内輪の話しを隠さずライブ感覚で番組に反映していく。

またバラエティ番組は劇に歌・アクションにトークなどと内容がバラエティに富んでいた。

ゲストもアイドルから演歌歌手と幅広く、大人から子供まで観られる内容であった。

『うる星やつら』のテレビ放送が始まる。※超重要！！

この作品で全世界のクリエイターがかわいい女性の書き分けを学ぶことになる。

それまではヒロインとライバルなどポジションでしか女性の書き分けができなかった。

性格による書き分けという、女性の内面を重視し、それを漫画としてどのように描き分けるか、どうすれば面白いドラマになるかを新人漫画家（当時）の高橋留美子はやってのけたのである。

さらには髪型、口癖、小物などで性格を強調する方法論などは人類（大げさか？）が初めて体験する驚異的な演出方法であった。

『うる星やつら』の模倣作品をあらゆる分野で多くのクリエイターが行い、試行錯誤の結果、多数ヒロイン作品が定番化することになる。

その試行錯誤の時代、あかほりさとるが時代の寵児となり、その後ギャルもその作品の帝王となる。

あかほりさとるの活躍は各自で勉強してもらいたい。

映画『エレファントマン』がヒットし、漫画などに紙袋を被った姿が真似された。

1982年：『機動戦士ガンダムIII めぐりあい宇宙編』『The IDEON（伝説巨神イデオン）接触篇/発動篇』公開『戦闘メカ ザブングル』放送開始

『超時空要塞マクロス』が放送される。

主役メカ『VF-1 バルキリー』のデザインが秀逸で玩具も大ヒット、映画化もされた。

アニメ業界から若い連中に何ができると言われていたが、結果を残したのだ。
監督の石黒昇は『宇宙戦艦ヤマト』で松本零士を補佐し本作でも若者主体の作品を纏めあげた手腕はさすがである。

石黒昇は後に『メガゾーン23』や『銀河英雄伝説』など話題作の監督を務めることになる。

『森田一義アワー 笑っていいとも!』が放送開始される。

NECがパーソナルコンピュータ『PC-9801』を発売。

『PC-98シリーズ』は一太郎など日本語ワープロソフトなどの販売で仕事用のパソコンの定番となる他、ゲームマシンとしても有名になる。

そして最高のエロゲーマシンとして君臨し、世界標準のDOS/Vマシンを長らく日本に導入させないことになる。

『魔法の天使クリィミーマミ』『キャプテン翼』の放送開始。

『魔法の天使クリィミーマミ』は少女ものアニメの新しい流れを作り出す。

『魔法のプリンセス ミンキーモモ』の布石もあったが、テレビ東京だったしなあ……。

このアニメはおニャン子クラブなどアイドルブームもあり人気となる。

が、当時は『装甲騎兵ボトムズ』に夢中だったので事情がわからない。

『キャプテン翼』はナレーション（実況アナウンサー）の村山明がほぼしゃべり放しで裏方を通り越した真の主演といえる活躍を見せている。

また女性の人気が高くコミケに『キャプテン翼』ゾーンが作られる。

この年は上記のように女性アニメファンの台頭と、男性アニメファンの美少女好きが表に現れる分岐点であったように思う。

漫画は『北斗の拳』（原哲夫、武論尊）と『美味しんぼ』（花咲アキラ、雁屋哲）が始まり翌年には『DRAGON BALL』（鳥山明）と漫画の黄金時代が始まる。

東京ディズニーランドが開園し、大人気となる。

1983年：『聖戦士ダンバイン』放送開始『ザブングル グラフィティ』公開

任天堂から『ファミリーコンピュータ』が発売される。流行るのは数年後。

ドラマは『積木ぐずし』（非行少女と家族の話）『おしん』（苦勞した少女が

企業家として大成する話し)『スチュワーデス物語』(どじな少女が一人前のスチュワーデスになると根性もの)『金曜日の妻たちへ』(不倫ドラマ)と幅が広いように思えるが女性が前面に出た、女性の気持ち至上主義のドラマばかりが流行る。

この世代女性をマスコミがやたら持ち上げたおかげで、後に大変なこと(参考文献『GS美神 極楽大作戦!!』)になる。

系井重里、林真理子などのコピーライターがキャッチアップされ、芸能人のような扱いを受ける。

広告に注目が注がれ、広告についての書籍やタレント本的なものがヒットする。

広告屋は好景気時代の英雄であったが、今観ても才能に溢れる面白い広告が多く、天才が誉められたという普通の出来事であったのかもしれない。

原田知世が映画『時をかける少女』でデビューする。

出淵裕、とりみき、ゆうきまさみ、河森正治(順不同)などが熱烈なファンとして公私の隔てなく活動を行う。

1984年：『重戦機エルガイム』放送開始

『風の谷のナウシカ』が劇場公開される。

月刊アニメージュで富野由悠季と組んでいた鈴木敏夫が、宮崎駿に目をつけ実現させた映画である。

千葉繁が出ていると視聴率が高い、というフジテレビ上層部の判断でこの時代多数の作品に起用されていた。

『北斗の拳』では千葉繁のスーパーハイテンションなナレーションや、神谷明の渋い演技も話題となり人気アニメとなった。

ナレーションの千葉繁は『獣電戦隊キョウリュウジャー』(2013年2月17日放送開始)でもスーパーハイテンションなナレーションをみせつけた。

グリコ・森永事件で、オタク的にはアニメとのタイアップのお菓子が店頭から消え困る。

くりいむレモン『媚・妹・Baby』の発売で、ポルノアニメ産業が本格化する。ミセイネンダッタノデヨクワカリマセン。

ドラマは『スクール☆ウォーズ』が大人気となる。
不良生徒を熱血教師がラグビーを通して成長させる物語である。
先生役の山下真司は『獣電戦隊キョウリュウジャー』（2013年2月17日放送開始）でも熱い演技をみせつけた。

続編までの総括

この他にも多くの出来事があった。
若い人にはこの時代次々と新しい刺激が湧き出たことを知って頂きたい。
また女性が全面に出てきた時代でもあった。
日本人の中で女性の価値観が激変したというか、男性が軟弱になったともいえる。
日本が近代化したとも言えるし、古い日本が忘れられたとも捉えられる。

何度も書くがコンビニとファストフードの拡大が決定的に生活を変えた。
お店というのは夜の7時には閉まるものであったし、飲食店も昼と夜しか開いていないのが当たり前であった。
都心でも正月や連休の時期には全ての店が閉まっていて困るという状況もありえた事が嘘に聞こえるだろう。

かつては深夜はバーやキャバレーに通う大人の世界であった。
今やコンビニや牛丼屋を求める学生などの時間へと変貌したのだ。

経済にも大きな変化があるのだが、これは各自で調べて頂く方がいだろう。

宇宙世紀の戦後を妄想する

ジオン公国と地球連邦の戦争は総人口の半数を失いながらも継続し、大規模な戦闘を何度も行った。

総人口の半数というが殆どが連邦側の被害で、壊滅と同意であった。

だが環境汚染は戦争で悪化し、政府の宇宙移民政策は継続される。

そして宇宙移民者の自治を要求しながら、多くの宇宙移民者を殺戮したジオン公国が宇宙移民者から絶大な支持を得ているという事実がある。

都市にも色々あり、宇宙移民者がそれを葬りたいと思うほど酷い都市が大多数であったのはなかろうか？

戦後総人口は半数以下になるが軍人の比率は戦前よりはるかに増大し、解雇すると失業問題になるし軍のクーデターも想像できる。

何よりも宇宙移民者の復讐が怖い。

そこでジオン軍の残党狩りを目的にする特殊部隊ティターンズを組織した。

ティターンズが成立する理由は連邦政府に問題が多いからだ。

政府がふがないと、軍による急激な改革を望む声があったのだろう。

だがティターンズは暴走し反ティターンズ運動が盛んな宇宙都市に毒ガスを注入し市民を虐殺し、それを隠蔽した。

地球の主要都市は空爆され環境汚染も悪化し、商業活動どころではない。

幸い月面都市は戦争の被害も少なく、戦後は月の企業が経済を動かすことになった。

彼らにとりティターンズのような暴力集団が存在することは問題がある。

また軍の内部にもティターンズを嫌悪する人々が現れ、両者は手を組み反ティターンズ組織エウーゴを設立した。

このように暴力が市民を恐怖にさらしたのが宇宙世紀の戦後であった。

20世紀には冷戦という、武力を使わない大国の戦いがあった。

核兵器による恫喝がまかり通り、それが平和と呼ばれた時代である。

だが共産主義（社会主義）国が自国民を虐殺したり、他国へ侵略するなど暴虐をつくしていた。

元々自国の一部でありこれは内政の問題であると嘯き、核兵器の恫喝で大国の介入を拒んだのだ。

日本やアメリカのような自由主義国家は、この虐殺を傍観していた。
つまり冷戦というのは民主主義が共産主義（社会主義）の恫喝に敗退した時代であった。

このような時代背景を若い人には知って頂きたい。

そして作中では頼りなく思えるエウーゴだが、ティターンズのような暴力組織に立ち向かうことの意味と意義を理解してもらいたい。

『機動戦士Ζガンダム』（1985年3月2日放送開始）の物語

軍の特殊部隊ティターンズが政府をも支配しようと企てていた。

しかし野望に燃えるティターンズの武力恫喝に反発した市民と軍の一部は反ティターンズ組織エウーゴを結成し暗闘を繰り広げていた。

両者は全面的な武力衝突を開始し、連邦は内乱常態となる。

カミーユとシャアはエウーゴに参加し、ティターンズの企みを阻止する戦いを行う。

そんな中、木星船団のキャプテンのシロッコは権力を求め跳梁し、小惑星アクシズの首魁ハマーンはジオンの復権を狙う。

ティターンズは超兵器コロニーレーザーにより反対派の一掃を目論むが、エウーゴがそれを奪取しティターンズを壊滅させた。

エウーゴは勝利したが戦力の大半を失う。

二人の主人公

今作は明確に二人の主人公が設定された。

カミーユ・ビダンとシャア・アズナブルである。

サイド7の学生カミーユ・ビダンは、嘲笑されたからとティターンズの隊員を殴り飛ばすような軽率な少年だった。

カミーユは盗んだガンダムMarkIIと共にエウーゴに逃亡する。

そしてエウーゴのパイロットとして様々な人物や事件、戦闘に遭遇し、それはカミーユを急速に成長させる。

だがハマーンやシロッコなどの強敵に対して、カミーユとΖガンダムは限界を超えた力を発現していく。

戦場はカミーユの心を蝕み、仲間達との死別がそれを悪化させていく。

最後の戦いでΖガンダムがシロッコを倒すが、カミーユは廃人となる。

旧ジオン軍の赤い彗星シャア・アズナブル大佐はクワトロ・バジーナを名乗りエウーゴに参加し巡洋艦アーガマのモビルスーツパイロットとなる。

しかしエウーゴの代表が暗殺され、シャアとして表舞台に出ることやむなくされる。

だが旧ジオンの亡霊アクシズや、シロッコの登場により事態は複雑化する。

エウーゴの代表となったシャアはアクシズの首魁ハマーンに協力を頼むが、ハマーンがジオンの遺児ミネバを道具にしたことでシャアは激怒する。

そしてティターンズ・エウーゴ・アクシズの三つどもえの戦いとなる。

だがハマーンとの戦いでシャアは行方不明となった。

その反響・・・というか感想

これで終えて良いのか？・・・というよりも、ここで終わるしか無い。

ともあれカミーユに気持ちを重ねていた視聴者には衝撃的なラストだった。

自分はカミーユと共に燃え尽きた視聴者の一人で、続編の『機動戦士ガンダムZZ』をちゃんと視聴するのはスカパー！に加入してからになる。

カミーユの誰にも噛みつく行いにも驚いた。

だが「俺にも言いたいことはある」と誰にでも怯まず口を出すカミーユは、同じような年頃であった自分の代弁者であったように思う。

楽しんで視聴していたのだが、アニメ雑誌によるバッシング記事により素直な気持ちで作品を見られなくなる。

放送中の『機動戦士Zガンダム』バッシングについて

続編って期待しちゃうよね、それが大人の策略なんだろうけどさ。

実際発表されると「こんなの違う！」と思う事あるし、続編から作品に触れたので他人が否定する気持ちがわからない事もある。

今は色々な意見に理解はあるつもりだけど『機動戦士Zガンダム』放送当時に強烈なバッシング（そしてスクープ合戦）された事を思い返すと、とても嫌な気持ちになる。

人気作の続編なので文句を言う連中も多かったのだろうが、アニメ雑誌（模型誌もだ）が率先して行ったのは罪である。

記事に扇動される読者もいたのだから。

角川書店が『機動戦士Zガンダム』の放送にあわせ出版した月刊ニュータイプに対する当て付けかもしれないけど、どうなんだろうね。

『機動戦士Zガンダム』の成り立ち

続編はサンライズの経営が悪くなったという『機動戦士ガンダム』スタッフの約束事もあり、安彦良和は続編制作に不満を述べている。

主役のカミーユ・ビダンを演じた飛田展男もオーディションで綺麗に終わった物語の続編を作ることへの不満を富野監督に述べたという。

内田プロデューサー（新人（当時）・現サンライズ社長）も『機動戦士ガンダム』の続編制作に驚いた。

『機動戦士ガンダム』の続編があるとは当時誰も考えていなかったからだ。（高橋良輔監督は放送当時から続編の可能性を指摘していた）

だが富野監督はサンライズからの、何となくの打診があったと発言している。事情はどうであれ1984年5月17日静岡模型見本市で、『逆襲のシャア・ガンダム』の発刊発表が行われた。

富野監督と永野護は先行して作業を進めていた。

それはガンダム世界のアップデートを目指したものであるという。

事実ガンダム以降アニメの表現は進歩し、現実の宇宙開発もアメリカのSDI構想やスペースシャトルの開発など大きな変化があった。

だが永野護のデザインに物言いがつき永野護は放送前に降板してしまう。

大人気作の続編ということで様々な人から意見が寄せられた結果である。

キー局も名古屋テレビからテレビ朝日になり、制作発表もテレビアニメとは思えないほど大々的に行われ、期待の高さを外野からでも窺えた。

しかし安彦良和はキャラクターのみの参加で、作画だけでなくスタッフは新人ばかりになった。

これでフィルムのクオリティを求める方がおかしいが、アニメ雑誌はそれを理解していながら批判するわけだ。

『機動戦士ガンダム』の続編を作る意図とは？

富野監督はこんな酷い状況で何故『機動戦士Zガンダム』を制作したのだろうか？

安彦良和が参加しないということの意味は誰よりも富野監督が理解している筈なのに。

過去の栄光を取り戻すため？

アイデアが枯渇したから？

それとも企画が通りやすいから？

断ることも出来た、原作者だし。

だが富野由悠季がそんな単純な男なら、もっと上手く世渡りをしている。

自分はこう考える。

それは当時の日本の現状に鍵がある。

まず日本の現状、アニメや漫画などの過剰な商業の拡大は『機動戦士ガンダ

ム』から始まったと言える。

しかも年々規模が大きくなり（バブル景気に入るところなので）、あらゆるメディアが下品（練り込まれていない、思いつきのような事がメディアに乗る。資本が余っているので投資の審査も緩い）になっていく時代に志のあるクリエイターなら反発を覚えるのは当然だ。

しかもこれらが自分のしでかしたことの結果だと思えば、責任が富野監督に重くのしかかるのは必然の事である。

『聖戦士ダンバイン』で警鐘をならしたものの現実は加速する勢いで悪くなる。

資本主義の加速に力を貸した、そして中心人物であったことへの自責の念と悪くなった日本の総括を物語りとして表現することにしたのが『機動戦士ガンダム』の続編『機動戦士Ζガンダム』である。

具体的には『機動戦士ガンダム』を今の日本のシンボルとして、主人公達がそれを倒すという物語にした。

『機動戦士ガンダム』から始まった不始末は『機動戦士ガンダム』が正さねばならないのだ。

それが続編制作の理由である・・・と思う。

だが物事を否定し破壊するだけなら誰にでもできる。

こんな時代だからこそ希望となるものが無ければ、公共の場に出す価値が無い。

そこで希望と夢を託す二人用意した。

前作のライバルキャラのシャア・アズナブルと、新主人公のカミーユ・ビダンである。

何故シャアとカミーユなのか？

カミーユ・ク洛伊デル（彫刻家ロダンの愛人で捨てられ心を病む）に引かれた富野監督だが、それ以前にカミーユ・ビダンの悲劇は組織に個人が立ち向かうことの必然だ。

カミーユ・ビダンは資本主義が加速する時代に、組織と戦える人物として現れた。

だからティターンズのジェリドでも、エウーゴのシャアでも、スポンサーであろうとも張り合う人物として劇中で書かれている。

組織に属しても、組織に頼らず個人として常に挑んでいた。
しかし正当な理由でも組織に個人でぶつかれば壊れるのは個人である。
だから大人に限らず組織に属する人物は、組織に隷従してしまう。
誰だって自分が傷つくのは嫌だし怖い。
だからカミーユ・ビダンも、組織人が夢見る英雄の姿である。

シャアの存在理由は『機動戦士ガンダム』を潰すのは他人であってはならないからだ。

シャアに託されたのは自分の間違いを自分で正したいと思う気持ち、これも人類共通の夢だ。

だがこれには未来が無い。

失敗を糧にするのではなく、過去の修正を望む行為だからである。

・・・しかしここで大きな問題がある。

シャアは既に死亡しているのだ。

蘇ったシャアについて

テレビ・劇場版ともに『機動戦士ガンダム』のドラマはシャアの死亡が確定し終わっている。

監督がどんな理由をつけようとシャアは故人である。

ただ今回の企画は小説版の続編として始まった経緯がある。

当初『逆襲のシャア・ガンダム』として小説の続編企画があり、それがテレビアニメの企画になった。

小説ではシャアは生存しているので問題は無い。

(それに小説ならばテレビスタッフとの約束は守られるという意味もあったのではなからうか?)

だが、ガンダムというタイトルは小説だけには収まらない。

そのような力が作品にあるからだ。

しかしテレビアニメという公共の場に出す作品として、アニメではなく小説版の続編というのはいない。

だとするとアニメを元にしながら、シャアの生存を許した、ある種のファンタジーとするしかないと判断したのではなからうか。

『機動戦士Zガンダム』はアニメ『機動戦士ガンダム』をモチーフにした二次創作、もしくは『機動戦士ガンダム』の続編を期待するファンが願う夢なの

かもしれない。

しかしながら夢やファンタジーという理由でスタッフは纏められない。
自分も他人も騙す嘘、つまり『機動戦士ガンダムIII めぐりあい宇宙・編』
の続編という事にし、それを公式としたのではなかろうか。

また主演がアムロでないのは、アムロは前の世代の代弁者だからだ。
カミーユ、シャア、アムロの三人は監督の分身なので、カミーユをシャアや
アムロが導くことは出来ない。
自分で自分に意見を言っても独り言にしかならないからだ。

シャアであるわけ

シャアは『機動戦士ガンダム』を代表する人物だ。
生い立ちも含めドラマとして芯が通っているのはアムロではなくシャアの物
語である。
つまりシャアを葬らねば『機動戦士ガンダム』を潰すことは成立しない。
迷惑な話だがチャンスがあれば乗るのがシャアだ。
理不尽な事なら慣れていると躊躇いも無くこの『ファイナル デッド コー
スター』のような企画に参加するだろう。

シャアの戦後はこうなった！

ジオン軍の一部は世界各地に潜んだ。
連邦政府に対する怨念は終戦という言葉ですまされない、という事なのだろ
う。
シャアは小惑星アクシズに逃れた。(ということになった)
小説ではサイド3にいたが、アニメでは無理があるので居留地をひねり出し
たのだろう。
またシャアが自由に動けると面倒なので足かせの意味もあるし、前作で過去
の話しを消費したのでドラマに必要な過去の出来事をここで補充するのだ。
そこで彼はザビ家の遺児ミネバの保護者として過ごしていた。
彼女が自分のような復讐鬼にならぬよう願いながら。
また統治者の娘ハマーン・カーンと恋人のような関係であったという。

だが地球と宇宙都市の置かれた状況を知ると、アクシズには立ち止まれない。地球と宇宙移民者達の心の壁を崩すことが、自分の責務であると考えたからだ。

シャアはその理想を全人類が宇宙に移ることで実現できると信じていた。

エウゴは自分の理想とは異なる思想の組織だが、ティターンズを見過ごしては軋轢が深くなるばかりだ。

だからシャアはクワトロ・バジーナを名乗り、更なる偽名で参加をした。

『機動戦士Zガンダム』のライバル達

パプティマス・シロッコ（木星船団の若き艦長）

ファンが思う理想のアムロで、自分で開発したモビルスーツに登場し、男女にモテモテで物語の命数を握る重要人物だ。

アムロの代理として存在しているので、本物のアムロと出会うことは無い。

偽物なのでシャアもシロッコには本気になれない

そして重要なのはシロッコには権力欲しかないことだ。

権力を得ようとどんな嘘でもつくし、だから自分しか信用していない。

傍観者のような振る舞いも、権力を篡奪することしか考えていないからだ。

それが天才の素顔である。

物語では権力であるが、経済がテーマなので金にしか興味の無い奴ということになる。

シロッコのような人物が跳梁するのが素人目にも分かるのは86年以降なのだが、この先見性には驚愕するしかない。

それは金持ちに成り上がることが正しい行いとマスメディアが持ち上げたからである。

問題なのはマスメディアにしっかりとした倫理基準が無いことで、悪党でも構わず英雄として宣伝したことにある。

そして現代は金融をゲームにする連中が跳梁する時代で、『機動戦士Zガンダム』のメッセージは古びていないことが確認できる。

ハマーン・カーン（ジオン軍の小惑星アクシズの女性代表）

過去に縛られ前に進めない彼女は、シャアをジオンの元に戻そうと勧誘を続ける旧作ファンの化身である。

しかもニュータイプになれば人が善なるものになる、という幻想を消し去る悪意の持ち主（シロッコも同様）だ。

ラアの代理ならばアムロの代理のシロッコに絆されそうなものだが、その気配はない。

ハマーンはシャアの代理だからだ。

偽物同士なんとなく気になる、という程度だ。

シャアとしては過去を忘れ、前に進みたい。

だがハマーンが過去のシャア、復讐者として立ちはだかる。

ハマーンにとりシャアがアクシズに来れば、代理という立場を捨てること出来る。

だから是が非でもシャアを仲間に引き入れたいのだ。

しかしシャアは姿をくらまし、ハマーンは代理として振る舞い続けることになる。

現実世界にハマーンを置き換えれば過去の資産で儲けようとする、土地成金志願者だ。

そしてシャアに、この契約書にハンコを押せと迫るわけだ。

そりゃあ必死に逃げますよね。

ジェリド・メサ（ティターンズのパイロットでカミーユに因縁をつける）

本来カミーユのライバルになるポジションであった。

反発心が強いなど共通点もあるし才能もあるが、明確な目標が無いのが決定的であった。

目標が無いので一話から精神的に成長しない。

出任せでティターンズの支配者を目指すなどと言う粗忽者でもある。

だからカミーユを見つけると自分の不甲斐なさが分かり、冷静でいられなくなる。

エリート意識だけは強いので、新型モビルスーツに乗り換えると満足してしまう。

つまりメカマニアやプラモ好き、ドラマに興味の無いファンの化身だ。

物語の当初、ジェリドのガンダム奪うのはマニアからガンダムを取り上げる、という意味となる。

劇場版で新型モビルスーツに乗ったジェリドにカミーユが「戦場ではしゃぐんじゃない」と言われるのも当然である。

フォウ・ムラサメ（記憶と肉体を薬物で改造された少女）

進んで商業主義に取り込まれる子供、それは被害者でもあるし加害者でもある。

カミーユも被害者であり加害者でもあるのでフォウとは強く理解しあえた。

同じ境遇に居る初めての同世代だが、フォウは善悪の判断が出来ず積極的に加害者側に立つことを選ぶ。

自分が無い存在は、プロパガンダに流され道具になるしかない。

強化人間とは宣伝や広告に流されやすい、現代人そのものだ。

他にも意味のある人物が多数登場するが、ここでは省略する。

こうして綿密にドラマ構成を考え人員を配置したのだが、問題となるのがガンダムの新テレビシリーズが決定し、さらに新テレビシリーズ放送中に新作映画が決定したことだ。

連作となる『機動戦士Zガンダム』

本来『機動戦士Zガンダム』の次は内田プロデューサーが企画した新作（富野監督ではない）になる予定であった。

だが富野監督が『機動戦士Zガンダム』の続編を提案し、それが快諾された。

富野監督はサンライズの山浦栄二からの提案だと言う。

続編であるにしても新しいキャラクターのみで物語を作るという選択もあったが、ダイレクトに繋がる連作となった。

つまり『機動戦士Zガンダム』だけでは総括できぬ、という判断が監督にあったのだろう。

資本主義の化け物、成金シロッコは倒したものの最終的にはシャア（とアムロ）を葬らないと創作意図が完結しない。

何故なら彼らは『機動戦士ガンダム』そのものだからだ。

しよせん代理では人柱として不足であるのだ。

しかし『機動戦士Zガンダム』では二人を葬る理由が薄い。

理由がない状況で、無理矢理ドラマをねじ曲げるわけにもいかない。

だから延長戦で理屈をつけようとしたのではなかろうか？

また『機動戦士Zガンダム』の最後は必然だが、やりすぎの反省もあったの

だろう。

もうすこし気持ちの良い最後で終わりたいと。

だがシャアの最後が持ち越された結果、『機動戦士Ζガンダム』はカミーユだけが強く出てしまい、シャアの役割が曖昧になってしまった。

劇場版でもシャアはケーキを食べに出ただけと酷評された。

葛藤の『機動戦士ガンダムZ Z』（1986年3月1日 放送開始）の話し

エウーゴの勝利で終わった戦いだが、連邦軍の力も弱まった。
アクシズはネオジオンを名乗り軍事侵攻を開始した。
宇宙都市シャングリラに寄港したアーガマは傷つき人員も不足していた。
成り行きでジュドーたちはアーガマに雇われ、成り行きで世界を巡りそこで戦争が自分たちと無関係でないを知る。
地球侵略寸前、ネオジオンではグレミー派による反乱が起きる。
なかなか動こうとしないエウーゴを見限り、ジュドーたちは独自にネオジオンの反乱に介入しグレミーを倒す。
そしてハマーンとジュドーの一騎打ちとなりジュドーが勝利する。

続編の課題

『機動戦士ガンダムZ Z』は前作で取りこぼした連中を肅正する意図をもつ。腐敗した官僚や政治家など、それらは現実でも悪だが最前線の兵隊を倒しても世の中は救われないから、物語の中だけでも倒しておく必要があるのだ。

また明るいガンダムなどというアニメ雑誌がつけたキャッチコピーではなく、富野監督は当初から『機動戦士Zガンダム』から引き継がれた暗い部分を指摘している。

よく言われるように後半で物語の作風が変わった訳で無く、主人公達が世界の真実に近づいたから話しが重くなるのである。

今作では前作でアニメ雑誌や批評家などに言われた不満点も子供でも分かる形で改善され、テレビアニメの見本となる作りになっている。

人間の光と闇

主人公のジュドー・アーシタ（妹の為に生計をたてるジャンク屋の少年）と妹（しっかりもので兄とは仲良し）はシャアの理想の兄妹の関係である。

ハマーンはシャアの闇の部分、独裁者となってでも世界を正したいと思う気持ちの代弁者だ。

つまりシャアの心の葛藤をドラマ化したのが『機動戦士ガンダムZ Z』である。

ハマーン（悪いシャア）は地球侵略を実行し、半ば成功しそうになる。

しかしハマーンは理想のシャアであるジュードのスカウトに気をとられたり、地球侵略が眼前に見えた処で反乱も起こり計画が頓挫することになる。

（映画が無ければ、ここでシャアが再登場したはずだ）

そのかわりジュードは理想のシャアなので、内乱が起こるとハマーンを助けることをしてしまう。

ハマーンもそれを当然とする。

改めて考えるとシャアはハマーンに妹の姿を求めていたのかもしれない。

破局した恋人というよりは、ニュアンスの取り違いによる失敗とかのほうがりっくりくる。

だからハマーンは、ジュード（理想のシャア）を求め正しい男女関係をやり直そうとしていたのだろう。

誤算なのはジュードにとりハマーンは趣味じゃない（実妹がいるので代理の妹としてもいらない）ことだが、ハマーンの誇りがそれを許さない。

最後理想のシャアであるジュードがハマーンに勝利するが、シャアから見ればそれは絶望である。

誰もが理想の自分になれるわけではなく、理想を求めても届かないのが普通だ。

ジュードを見てシャアは俗人である自分を認めざる得ない。

ジュードがもつ健全さや素直な気持ちは、シャアには持ち得ない。

また宇宙市民にとりジオンというのは、シャアの父ではなくザビ家である。

それを今回の騒動により確認してしまった。

ジオンのシャアという記号は人々の怨念を纏めるだけの求心力しかもたない。

これでは人を正しく導けない。

良いアイデアがあっても形に出来なければ無意味だ。

絶望を抱いて隠居する人生もあるだろうが、シャアという男が夢を叶えず死ぬ事はありません。

だがシャアの本音、本当の夢とはなんだろう？

人類の救済か？

それはアイデアがあるということで、実現できても出来なくても結果として受け止めるだけだ。

事実シャアは今までも実現に向けて動こうとしなかった。

ニュータイプによる世直し？

ハマーンやシロッコを見ればニュータイプに幻想は抱けない。

ならば過去に遡り別な望みを探そう。

・・・そう、それはガンダムとの対決だ。

『機動戦士ガンダム』で親友を裏切り心が荒んだシャアに活力を与えたのはホワイトベースそしてガンダムだ。

強敵との戦いだけがシャアを全ての束縛から自由にさせてくれた。

最後に戦う相手として、ガンダムほど相応しいものはないだろう。

『機動戦士ガンダム』で最後にザビ家への復讐だけが残ったように、シャアにとりガンダム(アムロ)との対決だけが彼に残された最後の希望となるのが、シャアから見たこの物語の結論である。

プルとプルツー

ネオ・ジオンの強化人間のクローン少女で、エルピー・プルと呼ばれているのが最初の一人だ。

当時のアニメディアの人気投票そして現在でも高い人気を持つキャラクターである。

なんていうか、プルは普通の子供で前作の強化人間とはどこか違う。

だがプルツーというもう一人の自分が現れる。

プルツーはクローン人間の一人であり戦闘用に調整され、マスターであるグレミーの命令に従うよう洗脳されている。

ジュードとハマーンがシャアの光と闇であるように、プルとプルツーも光と闇という関係になる。

これはやさしいアルテイシアとシャアに厳しいセイラという二面性を持つ人物の表現であるのかもしれない。

マクガフィンとしての妹

マクガフィンとはスパイが盗む書類のようなもので、登場人物の活動動機である。

詳しい定義は各自調べて頂きたい。

『機動戦士ガンダムZZ』では妹がそれにあたり、妹を奪い合う物語になっ

ている。

これもシャアの葛藤の表現で、肉親の情を捨てきれない彼の悩みの具現化だ。

グレミー・トトとは何者か？

プル・シリーズを道具にするグレミーはキャスバルの影だ。

血筋というものを信じ支えにして生きた青年で、本来表に出てはいけない存在である。

リィナやプルに代表される妹的な存在が、キャスバルを引きずり出したのだ。

ハマーン（闇のシャア）とジュード（光のシャア）たちとグレミー（影のキャスバル）が対立するのは、共に妹を奪い合うライバルだからだ。

そしてプルツを支配するグレミーを、ジュードがハマーンより先に叩くのは当然である。

妹の系譜

ジュードの妹リィナが消えるとプルが代理となる。

そしてプルツが現れ、プルが消える。

ジュードたちはグレミーを倒しプルツを奪還する。

ジュードとハマーンの対決の時にプル・シリーズ（完全な戦闘兵器となったプル）に妨害されるのは、妹の立場としてシャアの代理戦争という行為が許せないからだ。

だからマスターが死亡していても勝手に動く。

二人はシャアの代理なので妹は倒せない。だからキャラ・スーンに任せることになる。

ハマーンとジュードの対決はジュードが勝利するが、プルツがプルの意思を継ぎ、最後の力を振り絞りジュードの危機を救うことになる。

プルツの死とミネバの失踪で妹の系譜は途切れたかに見えた。

だがセイラ（シャアの妹）によりリィナは守られ、最終回で再会する。

リィナ、プル、プルツと妹の系譜と呼んでもいいこの流れは、意思の継承の一つで本作のテーマそのものである。

ザビ家の遺児ミネバ

ザビ家の遺児ミネバは『機動戦士ガンダム』で登場している。

ジオンの宇宙要塞ソロモンから母と共に赤ん坊のミネバは脱出し、戦後は小惑星アクシズに匿われていた。

七年後『機動戦士Ζガンダム』登場時に母親の姿は無く、ハマーン・カーンが摂政として傍らにいた。

アクシズでシャアの庇護の元成長したミネバは妹というより娘に近い。

シャアにとり復讐の相手ではなく、守るべき肉親であった。

だが物語の最後、ネオ・ジオンのミネバは影武者にすり替わっていた。

ザビ家の遺児ミネバは歴史から失われたのだ。

解釈の一つとしてシャアが連れ去ったという説もある。

それならばシャアにとり娘のようなミネバの安全を、確保したことになる。

仮に死亡したとしてもシャアの失意が深まるだけである。

マクガフィンを手にしたものが勝利者になる。

つまりミネバの失踪でジュードが戦争の勝利者ではなくなった事になる。

事実ジュードは嘆き悲しみ、やり場の無い怒りをブライトにぶつけた。

もしもシャアが連れ去ったのなら、シャアがこの戦争の勝利者であるということだ。

だがジュードはシャアの妹のセイラに匿われていたリィナと再会する。

ジュードは妹を取り戻し、最後に勝利者となりドラマが終わる。

シャアの妹セイラ

兄は死ねばいい！

そう思っているのがセイラ・マス、本名をアルテイシア・ダイクンである。

思想家ジオン・ダイクンの娘で、本当のジオンのお姫様である。

兄を慕い心優しい少女だったというシャアの記憶はともかく、ホワイトベースで一番気が強い女性であった。

兄妹はお互いのことを案じているのだが、妹の発言はいつも辛辣だ。

兄がシャアを演じていることに無理を感じているのだ。

その無理が兄だけでなく周囲まで破滅させるものであるとしたら、肉親としては止めるべきだろう。

そんな思いが極端な言葉遣いになる。

それがシャアの大事な妹である。

ハヤトの死

ハヤトの死亡は富野監督も後に後悔した。

それはハヤトを殺す事で創作意図が実現できるわけではないからだ。

しなくてもいいことをしてしまった。

だがハヤトの意思でそうなった、そうとしか言いようが無い。

この後悔の思いは徳間版小説『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』に反映された。

シャアの過去の行いについてはあっさりとしているが、ハヤトの死は何度も作中でピックアップされた。

これは異例なことである。

カミーユの再起の意味

ハマーンが消えカミーユが再起するのは、カミーユを潰せる組織が無くなったので正常化したということだろう。

- 地球連邦政府 → ネオ・ジオンの侵攻で首都を放棄
- 地球連邦軍 → ネオ・ジオンの侵攻を止められないほど弱体化
- ティターンズ → 前作で壊滅
- エウーゴ → 前作で戦力を失う、今作では最終回にようやく艦隊を編成出来た
- アクシズ → アクシズの勢力は地球侵攻と反乱で瓦解
- 旧ジオン → 首都の宇宙都市が半壊

・・・など『機動戦士ガンダム』を潰すという役割は果たした。

今作は『機動戦士Ζガンダム』の後継者としての責務はこなしたのである。

ただし続編でシャアとアムロの決着をつけることが残った。

シャアの役割を再確認

蘇ったシャアの使命は、過去の清算である。

また『機動戦士ガンダム』を見立てて、加速する資本主義への警告を行うこ

とが目的である。

だからシャアの対決相手はハマーンやジュードでは不足なのだ。

『機動戦士Zガンダム』で一方向的にハマーンにやられていた癖にと思われようが、志がシャアにはある。

だから今作では傍観者として過ごし、次のチャンスを狙った。

『機動戦士ガンダムZZ』のメッセージ

本作では「意思の継承」が人類の希望として提示された。

ジュードがカミーユの意思を継ぎ、仲間達もそれぞれ誰かの意思を継ぎ活躍した。

最後の戦いでジュードはみんなの意思を継ぎ、ハマーンと対峙した。

それは続編として正しい健全なメッセージである。

だからジュードが自分の意思で、誰かの代理で無く一人の人間として旅立つことで番組は終わる。

『プレリユードZZ』について

放送前の特番それが『プレリユードZZ』である。

クイズ形式で世界観を伝えるというもので、シャアが出題し子供達が答えるという内容だ。

富野由悠季狂ったか？と思われた人もいるだろうが編集したのはアニメライターでアニメ店長（アニメ商品の通販番組があり声優の女の子が店員、小林治は店長という設定だった）こと小林治だ。

ある日、サンライズに依頼され速攻で作ったものらしい。

『機動戦士ガンダムUC』などミネバ生存説について

ミネバ生存説は多くあるが『機動戦士ガンダムUC』はその最新のものである。

ガンダムの続編は全て二次創作・ファンタジーであるのだから、各自好きなものを選べば良いと思う。

この頃のアニメプラモ事情

アオシマから発売された『伝説巨神イデオン』の設定そっくりなプラモや、タカラの『太陽の牙ダグラム』『装甲騎兵ボトムズ』などでアニメモデルは進化した。

そして『超機動要塞マクロス』のバルキリーで秀逸なメカデザインとイマイとアリーの二社から発売されたプラモも人気となり、業界はバンダイの独占状態では無くなっていた。

バンダイは当たり外れがあり『戦闘メカザブングル』は良く出来ていたが『聖戦士ダンバイン』では曲面を生かしたデザインを再現しきれなかった。

ガンプラは漫画『プラモ狂四郎』の人気もありアニメのプラモデルの代表であったが、漫画はオリジナルのメカが活躍していた。

『重戦機エルガイム』のプラモは設定をくんでゴムや金属などのパーツを使うなど挑戦的で、番組の延長が決まるほどの売れ行きを見せた。

(半年単位でなく細かい放送延長要請が何度もあり、スケジュールの問題で延長を断ることになった)

後に販売用コンテンツとして総集編と新作アニメが追加で作られた。

『機動戦士Ζガンダム』ではプラモの売れ行きが悪かったという話もあるが、それは当然で『戦え!超ロボット生命体トランスフォーマー』(1985年7月6日放送開始)のヒットで、昔ながらのロボット玩具ブームに戻るようになったのだ。

その結果、バンダイも『マシンロボ』という玩具シリーズを出し対抗することになる。

そして同年9月13日『スーパーマリオブラザーズ』が発売され、ファミコンブームも到来する。

また『SDガンダム』シリーズが始まり、子供はこっちに夢中になる。

いや、まあこれだけの強豪相手に『機動戦士Ζガンダム』のプラモは売れ行きが悪い程度で軽傷だったよ。

ファイナルステージ『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』（1988年3月12日松竹系公開）のストーリー

シャアはネオ・ジオン総帥となり地球に隕石を落とし人を住めなくしようとしていた。

地球連邦軍の独立部隊 Rond・ベルはエースパイロットのアムロを筆頭にネオ・ジオンと戦っていた。

地球連邦政府はネオ・ジオンと講和条約を取り交わしたが、それは嘘であった。

武装解除するふりをして地球連邦軍の基地を襲い核兵器を篡奪、小惑星アクシズを地球へ落下させ核汚染までしようというのだ。

Rond・ベル部隊は独自にアクシズ落下を阻止するべく攻撃に出る。

シャアもモビルスーツ・サザビーでアムロのガンダムと対決を行う。

Rond・ベルは様々な方法でアクシズ落下阻止を試みるが失敗、サザビーを倒したアムロは脱出したシャアを連れ重力に引かれ落ちるアクシズをガンダムで押し返そうとする。

そこに連邦軍やネオ・ジオンの兵士も集まり、ガンダムとシャアの脱出カプセルから謎の発光現象がわきあがる。

謎の光は広がり、その光の流れに乗りアクシズは地球から遠ざかる。

大人になった二人

この時代、若者の愚直さや必死さがシャアとアムロの心には届かないほど、彼らは大人になり子供に無関心でいた。

物語の最後、二人は謎の光に狼狽することになる。

サイコフレームの光（謎の光で物理現象をねじ曲げ地球の危機を救った）が狼狽した二人を飲み込むのは、それは無名の人々の輝きで英雄の起こす奇跡では無いからだ。

『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』は『機動戦士Zガンダム』の焼き直しであり、ファンが見たかった『機動戦士ガンダム パート2』である。

だがこの時代、シャアとアムロは排除しなければならない人物、つまり私欲の為に戦う大人になってしまった。

それがファンの望む姿であったとしてもだ。

『機動戦士Zガンダム』で出来なかった『機動戦士ガンダム』を葬ることを実現する時が来たのである。

シャアを演じる

シャアはアムロと対決するためだけに組織を利用し、シャアを倒すためアムロも組織を利用する。

組織から見れば二人とも優秀な人材だが、実は個人的感情で動く駄目な大人だ。

彼らはそれぞれ決戦兵器を用意しボクシングのように、二人で戦おうと望んだ。

サイド6でシャアが逃亡に使用したホビー・ハイザックの撃墜命令をアムロが出せばそれで終わっていたが、シャアを見逃した事でアムロの本音がわかる。

アムロも心の底で対決を望んだのである。

アムロは『機動戦士ガンダム』世代の代弁者として、立派に駄目な大人となったわけである。

シャアもアムロが敵として相応しいように技術を流出させ、ガンダムをパワーアップさせた。

ネオ・ジオンがシャアの望むような組織であれば、アムロを暗殺したか仲間に引き入れたはずだ。

だがシャアのネオ・ジオンは映画を視聴しての通り俗物の集まりである。

赤い彗星のシャア、ジオン・ダイクンの息子の価値とはこんなものか、とシャアは一人自分を嘲笑っただろう。

だからこそ、組織を利用してでもシャアはアムロとの対決を望んだのである。

しかし理由が必要だ。(シャアはいちいち自己確認する癖があるので、何かにつけ理由がいるのだ)

シャアがアムロと戦う理由が思想の違いなどという、凡庸な理屈では困る。

それに思想の違いが理由ならばアムロが味方になる可能性がある。

二人は親友でいられる、と『機動戦士Zガンダム』のときに分かったからだ。

シャアはなんとなくアムロが好きだし、アムロはシャアをリスペクトしている。

それに妹の友人でシャアの愚行（生身での戦い）に付き合ってくれたアムロを、どうしても嫌いになれない。

シャアとシャアのライバルだけが分かる理由、二人がぶつかり合う決定的な出来事。

それはララァだ、シャアは彼女の死に涙したのだから。
彼は再びシャアを演じることになる、ララァを道具にして。
ララァが死亡した事実を思い返すシャアに情熱は無く、過去を再点検したのみだった。
それを愛とは呼ばないだろう。

サイコフレームの彼方に消える

アムロのガンダムがシャアを連れて地球へ落下するアクシズに挑むのは身勝手な振る舞いをしたことへの罰である。

その行為も無責任な大人の逃避に近く（英雄の犠牲ではない）問題を解決しない。

そこで二人は感情をぶつけ合うのだが、演出でも台詞でも最低にかっこ悪い二人になっており、アムロとシャアという馬鹿な大人を見せつける富野監督の意図がここで明白となる。

しかしシャアの「ララァ・スンは私の母になってくれるかも知れなかった女性だ」は家族を求めた、という意味だと思う。

ララァに導いて欲しかった。

それはザビ家への復讐という歪んだ自分を救う道しるべとしてだろう。

「私の母になってくれるかも」というのは言葉の意味も、母、すなわち子供をもつ女性であり、私とは父であり自分の分身である子供だ。

シャアにとり家とは両親と子供（できれば兄妹）がいる暮らしを指し、独身や片親では無いのだろう。

（だからクエスそしてミネバ・ザビの親の代わりにはなれなかった）

シャアは呪われた家でない、新しい家を求めた。その願いがああ台詞だと思う。

アムロとの対決を最後の望みと思っていたが、実は何より強い望みがあった。この発見はシャア本人にも意外なことであっただろう。

シャアの本音とは、ガンダムとの対決のはずだった。

戦いの高揚だけがシャアを全ての束縛から自由にさせてくれるからだ。

だがその束縛こそがシャアが目を背けていた肉親への渴望だった。

（ガンダムとの戦いで妹を殺す寸前であった出来事を後悔していない事から、戦いがシャアを全ての束縛から自由にさせるのは事実）

ネオジオン総帥や大人の世界の約束事などはシャアには些事であった。

断ち切ろうとしても、忘れようとしても、つきまとう肉親への情愛と渴望がシャアの真実の夢だった。

アムロからすれば母とは父と自分を捨てた、あの人なので驚くしか無い。ここにニュータイプの特感も、サイコフレームの力による相互理解もない。駄目な大人なので、誤解とすれ違いで終わる事になる。

サイコフレームの光とは

アムロやシャアの力では無い。彼らには何も感知出来なかったし、発光源としての自覚も無い。人が多く集まったからだというのが、それなら月でサイコフレームを開発していた時の方が人数はいただろう。

リガジィで出撃したチェーンは、クエスのアルパ・アジールを撃墜する。だが、ハサウェイはそれを間違いだと言い、リガジィを攻撃し撃墜した。サイコフレームの試験体はハサウェイの悲しみと怒りを受け止めた。だからバリアのような力を発揮しなかった。サイコフレームは人の意思を受け止める機能がある。そして意思を発露する力もある。

チェーンが撃墜後に理解したのは、ハサウェイがクエスに与えたかった愛情と信頼だった。

生のある時間までハサウェイの怒りを理解出来なかったが、サイコフレームが受け止めたその想いをチェーンが最初に理解した。

大人の無理解が若者たちを引き裂いた。

アムロへ近づきたいのにチェーンがバリアになると言っていたのはジェラシーではなかった。

子供とは世界が違ふと壁を作りアムロに近寄らせなかったのだ。

若者らしい憧れの気持ちを蔑ろにしたのは、チェーンだった。

恋人関係にあることを誇らしく感じ、我が儘に振る舞うことに慣れていた。

大人というのはなんと傲慢なんだろう。

そしてチェーンの作った壁がアムロを鈍らせ、殺すことも理解してしまった。

だが死後に気がついて遅すぎる。

そのチェーンの後悔をサイコフレームは受け止めた。

だからサイコフレームは宇宙を舞い、兵士達に伝えなくてはならない。
悲劇を繰り返してはならないと。
死後思うような事だから、戦場の荒ぶる兵士たちにも伝わったのだ。
そしてガンダムと重力に引かれ落ちるアクシズを押し返そうと、連邦軍とネオジオン軍の兵士達が協力をする。
落下し始めたアクシズの表面は高温化し、モビルスーツを内部まで焼き尽くすような地獄と化していた。
その地獄に飛び込む兵士たちの行いは、何の代償を求めない無償の行為そのものだ。
アムロのような自死に近い行為ではなく、未来を信じる勇気からの行動であった。

サイコフレームの光は、兵士達の心が放つ無償の愛の姿である。
だがアムロやシャアの意味ではないので、それを理解できなかった。
そんな二人を余所にして、サイコフレームの光は拡大しアクシズを包み込み軌道を変え、地球落下軌道から離れることになる。
それは奇跡としか言い様のない出来事であった。
ハサウェイはそれを見守る事しか出来ない。
ハサウェイにはクエスの死を受け止める時間もまだないのだから。

これは奇跡が起き人々が救われるのは、大衆が真実に気がついた時である。
大人が真実に気がつくには、代償を求めない無償の愛が必要であるのだと。
富野監督は封切り当時「35歳以上の大人になったら再度観て頂きたい」と語っていたが、このような理由からではなかろうか？。

また英雄にならなくても人は世界を救えるというメッセージでもある。

二人はどうなったのか？

どうなったか分からないというのが映像を見たままである。
ただサイコフレームの光に驚くアムロたちと、その光に導かれるようにアクシズが地球落下の軌道から外れたという事実だけが明らかだ。

解釈の一つであるが二人は行方不明となる、だが『機動戦士Zガンダム』の意気込みなら死亡と確定しても良いはずだ。

たった0.5秒でも映像を差し込めば確定するのに曖昧にぼかしたのは、視聴

者の解釈に任せるという事である。

なので自分なりの解釈として・・・奇跡が起き人々が救われるのは大衆が真実に気がついた時であると書いたが、それはガンダムの続編が夢であると気づくことも意味する。

そう！人は夢からは醒めなければならないのだ。

夢の中の人物は夢から醒めたら消える、だから死亡では無く消えたのだ。

だが無理矢理蘇らせたにせよ、キャラクターの存在を原作者が弄ぶことは許されない。

作者の意図はどうであれ一度作った人物を、無かった事には出来ないものだ。妥協点という言葉が悪いが、落とすどころが必要になる。

シャアの場合は、何時か何処かの母親の子供として転生するだろうということだ。

ララアは母親になってくれるかも、という程度でこだわりは無い。

家族という関係にあこがれたからで、実母や実父がいるならそれが一番に決まっている。

エンディングの赤ん坊の泣き声の意味はシャアの転生を意味している。

だが何処かの世界、いつかの未来のことだ。

地獄のような世界に蘇ったシャアは消え、どこかに転生し家族と仲良く暮らす。

そこには髪をいじるのが癖の親友一家もいるかもしれない。

それが無理矢理蘇らせた原作者からのシャアへの感謝の印だ、シャアもそれを運命として受け入れたはずだ。

アムロもまた自分の本当の願いとは違う処に居た。

連邦軍の兵器として才能を行使するしかない駄目な自分。

ララアの夢を見てしまう、過去に縛られたかつての英雄。

だからシャアとの対決の結果を覚悟していた。

謎の発光現象はアムロの予想外で、その結果も予期できないものであった。

サイコフレームに光に包まれたアムロは、刻の向こうララアと邂逅する場所へ向かった筈だ。

これはアムロとララアの『機動戦士ガンダム』からの約束だ。

シャアは転生してもういない。

アムロとララアは堂々と再会し、永遠の恋人として過ごすだろう。

シャアの愚行に付き合ったアムロへの最高の贈り物である。

こうして二人のガンダムを代表する人物が消え、『機動戦士ガンダム』の続編という夢から視聴者は目を覚ます。

醒めるべきだというメッセージだが・・・富野監督には申し訳ない大人になってしまった。

『GUNDAM EVOLVE』版『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』について

これはオールCGの短編ムービーで『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』を元に新規にストーリーを富野監督が書き下ろしたものである。

ハサウェイを殺してしまったと後悔するクエス。

動揺するクエスをアムロが説得を試みる。

アムロはハサウェイの生存を感知し、クエスもそれに気がつき戦場を離脱しハサウェイを向かえに行く。

・・・という、短い話しである。

ここでのアムロは駄目な大人では無い。

若者の気持ちを受け止め、未来を指し示す理想の大人である。

このアムロならばシャアを打ち負かした後、未来を生きれるだろう。

映画は小学生の頃からのファンを意識した大人向けのドラマである。

しかし今作は若者向けであるという事が決定的な違いとなった。

だが真実に気がついた時、人は救われるというメッセージは健在だ。

表面的な違いはあるが、根本は映画と同じである。

シリーズの総括として

連作の絵画のように『機動戦士Ζガンダム』のテーマは三作品を必要とした。

対となる絵画を見ることで制作者の意図が明確になるように、『機動戦士Ζガンダム』も三連作として観ることで明確になるものがある。

また資本主義への警鐘というのが『機動戦士ガンダム』の続編のカラーとして定着することになった。

この三連作はそれぞれ異なる希望を提示した。

『機動戦士Ζガンダム』は、組織と戦える人物を希望とした。

『機動戦士ガンダムΖΖ』は、意思の継承を希望とした。

『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』は、人々が救われるのは大衆が真実に気がついた時であるとした。

これは連作でありながら、それぞれが独自の価値を持つ作品として独り立ちしている証である。

連作の重要性はあくまでも作者のテーマを探す為のものであり、単独の作品としての価値を損なうものでは無いからだ。

『機動戦士Ζガンダム』は加速する資本主義への警鐘だと書いた。

それは大人の責任を問う物語であったので、大人に嫌われることになる。

大人は責任から徹底的に遠ざかろうと努力を重ね、嘘をつき、嘘をついたことも忘れ、責任を問われそうになると親しい相手でも罵倒する。

逆に功績は自分で独占しようとするし、他人の苦勞など直ぐに忘れる。

たぶん人類が人類である限り、大人はそういうものだと思う。

それは『機動戦士Ζガンダム』の物語は永遠に必要だということだ。

悲しい事でもあるのだが、このような物語があるという事実が救いとなると信じている。

だから多くの人に観て欲しい。

そして多くの人に『機動戦士Ζガンダム』を語りたい、と思って頂きたい。

劇場版『機動戦士Zガンダム A New Translation』（2005年）について

低予算映画で20年も前のフィルムに新規映像を混ぜてフィルムとして纏めようというのには無理がある。

だが時には自分を騙すことも必要で、それが出来ないと発狂するしかないという状況もある。

だから富野監督は全てを納得していると割り切るしかないのだ。

そして富野監督とスタッフの頑張りで『機動戦士Zガンダム A New Translation』はファンからも歓迎されヒットした。

一作目のスマッシュヒットで、ファンはオール新規作画の甘い夢見ていた。

だが声優交代を長所のように宣伝するのを見て幻滅した。

なんというか、まず、絵をもっと直せと思う気持ちは間違いだろうか？

劇場版の『機動戦士ガンダムIII』は70パーセントも新規作画なんだし。

この映画はラストの改変がありきで、一作目から多くの変更が行われた。

これは『機動戦士ガンダム』でシャアの生存という変更をするには、新訳と同じく多数の変更が必要であるということだ。

『戦闘メカザブングル』ではないので、付け足してすむ問題では無い。

ラストの改変は、インターネットの普及で組織と個人の力の差が時には逆転してしまうことを受けての事だと思う。

だがカミーユに託された組織と戦える個人は、夢や希望として常に健在である。

それを実践出来る人は少ないからである。

また近年の加速ではなく暴走する資本主義に警鐘をならす意味でも、この時代での映画化は必然であったように思う。

映画だからハッピーな結末にという単純な事では無く、意味のある改変であったのだが『機動戦士Zガンダム』なので大人からは褒められない。

声優交代騒動などで醒めてしまったファンも、ラストの改変を褒めたりはしない。

やり場の無い憤りを何処に納めたらよいものやら・・・。

この感覚が『機動戦士Zガンダム』を観ていた当時にとてもよく似ている。

後書き

恥をかこうと思いこの文を公開します。

このような長文になったことについてはお詫びするしかない。

数行で簡潔に書くつもりが、文章を書くとき新たな疑問点が次々生まれた。

その結果、当初とは違うものになったが内容には満足している。

当時の嫌な思い出もあり『機動戦士Zガンダム』の作品論は読んでいない。

『機動戦士ガンダムZZ』は作品論を観た記憶も無く、『機動戦士ガンダム逆襲のシャア』は押井守のコメントくらいしか覚えていない。

当時の批評は必ず富野監督の批判から入るので、読みたくない。

未だに『機動戦士Zガンダム』には否定的な意見が多い印象がある。

『機動戦士ガンダムZZ』も面白い作品なのに、無視する連中もいる。

この文が、そのような風潮へのアンチカウンターとなれば嬉しい。

この文の執筆に指針となったのは岡田斗司夫のガンダム語りである。

自分なりの模倣を試みたつもりだが、上手く模倣犯になれただろうか？

色々描きましたが、斜め読みでも一読でもしていただければ幸いです。

最後に富野監督の最新作に期待します。

奥付

2014年3月11日公開 バージョン1

文・太田行雄

ホームページ・富野由悠季：関連書籍まとめ（β版）

<http://books-db.sakura.ne.jp/index.html>

無断販売・複製・転載・地球への隕石落としなどの迷惑行為を禁止します。

参考文献

岡田斗司夫の『機動戦士ガンダム』論

流星改

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~ryuseik/>

Wikipedia

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

現代風俗史年表 昭和20年（1945）→昭和60年（1985）（世相風俗観察会編）

河出書房新社発行

現代風俗データベース 1986→1987（世相風俗観察会編）

河出書房新社発行

他・富野由悠季・機動戦士ガンダムファンサイトの皆様